

子どものスポーツクラブ活動に関する研究

―試合への出場状況と活動意識―

藤原 誠 ・ 堺 賢治

(保健体育研究室)

A Study on the Sports Activities of Children in Sports Clubs - Participation in Game and Consciousness of Sports Activities -

Makoto FUJIWARA and Kenji SAKAI

I. 緒 言

スポーツクラブへ加入してスポーツを実施している子どもは多い。日本体育協会の傘下にある、日本スポーツ少年団に登録している子どもの数は、平成15年度では全国で93万人に上っている（(財)日本体育協会日本スポーツ少年団, 2003）。少子化の進行等により、平成11年度には90万人程度にまで減少したが（(財)日本体育協会, 2001）、近年は、やや回復の傾向を示しており、活発な活動状況を呈している。このようなスポーツ少年団をはじめとする子どものスポーツ組織は社会の中に定着し、着実な活動を展開しているといえよう。

他方、文部科学省では、生涯スポーツの振興を目指し、総合型地域スポーツクラブの設立を促しているが（文部省, 2000）、この総合型地域スポーツクラブの設立基盤として、スポーツ少年団が重要な役割を担っているところも多い。生涯スポーツの振興という政策目標は国民の健康や生きがいの問題とも関係し、今後ますますその重要性を増し、これに基づく具体的施策が展開されることになるであろう。このような生涯スポーツ振興の観点においても、子どもの組織的スポーツは社会的な意義をもっているといえよう。

子どものスポーツについては、その功罪については、これまで多くの議論がなされてきたが（武藤, 1988；水内, 1991；藤田, 1992；池田ら, 2001）、これからは生涯スポーツの観点から子どものスポーツを捉え直すことが必要となるように思われる。できるだけ多くの子どもがスポーツに参加し、スポーツの楽しさを体感し、スポーツ

の良さを認識する。そのようなことが生涯にわたるスポーツの実施へとつながっていくように思われる。子どもの時にどのようなスポーツと出会い、どのような気持ちを持ち、どのような活動をしたかが、その後のスポーツ活動に重要な意味をもつといえよう。

そこで、本研究では、子どものスポーツクラブの活動を子どもの立場から捉え直すことを目指すことにした。具体的には、スポーツクラブの活動の実態を明らかにするとともに、スポーツクラブの活動に対する子どもたちの意識を明らかにすることを目的とした。その際、試合への出場状況による、活動に対する意識の差異について検討することにする。これらの状況から、みんなが楽しく活動できるスポーツクラブのあり方について考える糸口を得たいと思う。

II. 方 法

1. 調査対象

愛媛県松山市の小学校に通っているスポーツクラブ加入児童、5・6年生、448名を調査対象とした。

2. 調査方法

質問紙による配票調査を実施した。有効回収数は408、有効回収率は91.1%であった。

3. 調査時期

2002年10月から11月にかけて調査を実施した。

4. 分析の視点

表1に示すように、試合への出場状況により、「いつも選手として試合に出る」者をレギュラー群（A群）、「選手として試合に出ることが多い」者を準レギュラー群（B群）、「選手として試合に出ることは少ない」者、及び、「選手として試合に出ることはない」者をイレギュラー群（C群）とした。以下では各群を、それぞれA群、B群、およびC群と呼ぶことにする。

この分類にしたがって、スポーツクラブでの活動状況や活動意識について検討を行うことにする。

表1 試合への出場状況

項目	実数	%
いつも選手として試合に出る (レギュラー群・A群)	213	52.2
選手として試合に出ることが多い (準レギュラー群・B群)	102	25.0
選手として試合に出ることは少ない・ 選手として試合に出ることはない (イレギュラー群・C群)	93	22.8

Ⅲ. 結果と考察

1. 属性

(1) 学年

スポーツクラブへ加入している者の学年分布は表2に示す通りである。A群では6年生の占める割合が64.3%と高くなっている。B群およびC群では6年生の占める割合が、それぞれ、46.1%、36.6%となっており、試合への出場頻度が高いレギュラー群では6年生が多く、試合への出場頻度が低くなる準レギュラー群、イレギュラー群では6年生の占める割合が低下し、5年生の占める割合が増加していることがわかる。

一般的に考えて、6年生は5年生に比べてクラブでの活動経験が豊富な者が多く、このことが試合への出場状況に関係しているものと思われる。

(2) 性別

男女別の構成を示すと表3のようになる。全体としてみると、スポーツクラブに加入している者は、男子が

表2 学年

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
5年	35.7	53.9	63.4	46.6
6年	64.3	46.1	36.6	53.4

p<0.001

(χ^2 検定による、以下同じ)

65.4%、女子が34.6%となっており、スポーツクラブへの加入については男子の方が積極的であることがわかる。

各群を比較すると、A群、B群、C群の順に男子の割合が高くなっているが、各群と性別の間に関連は認められなかった。

表3 性別

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
男	70.0	64.7	55.9	65.4
女	30.0	35.3	44.1	34.6

n.s.

2. 活動状況

(1) 活動歴

加入しているスポーツクラブでの活動歴について尋ねると表4のような結果となった。A群では3年以上の活動歴をもつ者が35.8%を占めており、B群の31.4%、C群の17.6%に比べて多くなっている。これに対して活動歴が1年未満の者はC群で19.8%を占め、A群やB群に比べて多くなっている。このように、レギュラー群ではクラブでの活動歴が長い者が多く、イレギュラー群では活動歴の短い者が多いことがわかる。この活動経験の差が試合への出場状況に関係しているものと思われる。

表4 活動歴

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
1年未満	3.3	2.0	19.8	6.7
1年以上2年未満	24.1	29.4	27.5	26.2
2年以上3年未満	36.8	37.2	35.1	36.5
3年以上	35.8	31.4	17.6	30.6

p<0.001

(2) 活動日数

表5は一週間の活動日数を示している。全体では週5日活動している者が44.8%で最も多くなっている。これ

に、週6～7日の者を加えると、週5日以上活動している者は、全体の65.4%を占め、子どものスポーツクラブの活発な活動状況をうかがうことができる。

A群、B群、C群の比較においては、特に差異は認められなかった。

表5 活動日数(週) (%)

項目	A群	B群	C群	全体
1～3日	9.4	8.8	16.1	10.8
4日	27.4	25.5	14.0	23.8
5日	42.9	40.2	53.8	44.8
6～7日	20.3	25.5	16.1	20.6

n.s.

(3) 練習時間

平日および休日における一日の練習時間は表6および表7に示す通りである。平日の活動は学校の授業が終了した後、行われるので、平日は休日に比べて練習時間が必然的に短くなる。平日において最も多いのは2時間以上3時間未満の者であり、全体のほぼ半数となる49.4%を占めている。これに次いで多いのは1時間以上2時間未満の者であり、30.1%となっている。このように平日では2時間前後の活動を行っている者が多くなっている。

これに対して休日では、3時間未満の者から5時間以上の者まで幅広く分布している。休日においては練習時間が比較的自由に設定できることから、平日と同程度の時間で終了するクラブから平日に比べてかなり多めの時間をとるクラブまで、多様な活動状況がうかがわれる。5時間以上に及ぶ練習時間の者も全体の2割程度いるが、5時間といえば昼過ぎから夕食までの午後の時間をすべてクラブの練習に当てている状況であり、子どもたちにかかなりの負担を与えていることが想像できる。

各群の比較においては、いずれも同様な分布状況を示しており、特に差異は認められなかった。

表6 練習時間(平日) (%)

項目	A群	B群	C群	全体
1時間未満	2.4	5.0	8.0	4.3
1時間以上2時間未満	28.4	33.0	30.7	30.1
2時間以上3時間未満	51.4	49.0	45.4	49.4
3時間以上	17.8	13.0	15.9	16.2

n.s.

表7 練習時間(休日) (%)

項目	A群	B群	C群	全体
3時間未満	22.3	27.4	25.8	24.3
3時間以上4時間未満	33.2	36.8	34.9	34.4
4時間以上5時間未満	22.7	17.9	18.0	20.5
5時間以上	21.8	17.9	21.3	20.8

n.s.

(4) 活動への参加頻度

スポーツクラブの活動への参加頻度をまとめると表8のようになる。A群では「いつも参加する」者が74.6%、「たまに休む」者が25.4%となっており、積極的に活動へ参加している。これに対してB群やC群では「たまに休む」者が多く、「半々くらい」、あるいは「参加しないことが多い」という者もいる。このように、レギュラー群ほど活動への参加頻度の高い者が多く、準レギュラー群、イレギュラー群になるほど、参加頻度の低い者が多くなっている。レギュラー群では試合への出場機会が多く、活動に対して強い意欲をもち、積極的に練習しようという意識をもっている者が多いことを示唆しているように思われる。

表8 活動への参加頻度 (%)

項目	A群	B群	C群	全体
いつも参加する	74.6	48.5	43.0	60.9
たまに休む*	25.4	48.5	49.5	36.6
半々くらい・参加しないことが多い*	0.0	3.0	7.5	2.5

p<0.001

(*カテゴリーを合併して検定)

(5) クラブ内での技能レベル

試合への出場頻度はレギュラー群、準レギュラー群、イレギュラー群の順に高いわけであるが、この出場頻度を規定する主要な要因はクラブ員の技能レベルであろう。表9はクラブ内における各人の技能レベルを尋ねた結果を示している。「うまい方」と回答した者はA群では25.8%を占めているのに対して、B群およびC群では、わずかに5.0%、および、3.3%となっており、「うまい方」と回答した者は極めて少ない。これに対して、「どちらかといえばへたな方」、および「へたな方」と回答した者は、B群やC群で多くなっている。特にC群では70%を越える者が「どちらかといえばへたな方」、

あるいは「へたな方」だと回答しており、C群では技能レベルの低い者が多いことを示している。

表9 技能レベル

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
うまい方	25.8	5.0	3.3	15.5
どちらかといえばうまい方	55.5	58.0	25.3	49.2
どちらかといえばへたな方	15.8	29.0	54.9	28.0
へたな方	2.9	8.0	16.5	7.3

p<0.001

(6) クラブでの交流

クラブの活動への参加に関係して結ばれる人間関係には、子どもと親、子どもと指導者、親と指導者、子どもと子ども、親と親など、様々なものがある。しかし、直接の指導場面や活動場面においては、子どもと指導者の関係、および、クラブ員である子ども同士の人間関係が重要になる。過去の調査研究では、子どもたちがクラブをやめていく理由として、クラブ内の人間関係がうまくいかないことをあげる者が多くいることが明らかになっている(藤原, 1997; 藤原・堺, 2003)。このようなことを考慮して、以下では、クラブ内における子どもと指導者、また、子ども同士の関係について検討することにする。

表10は、体調が悪いときやけがをしているときに指導者がどの程度心配してくれるか、子どもが感じている指導者の配慮の状況を示している。「いつも心配してくれる」と回答した者はA群において過半数の54.3%を占めており、B群やC群に比べて多くなっている。これに対して、「あまり心配してくれない」、あるいは「心配してくれない」と回答した者はA群に比べてB群やC群で多くなっている。このように試合への出場機会が多い、いわゆるレギュラー群では、指導者が体調やけがに対して

表10 体調などの心配

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
いつも心配してくれる	54.3	37.4	38.9	46.6
どちらかといえば心配してくれる	36.2	44.4	45.5	40.4
あまり心配してくれない・心配してくれない	9.5	18.2	15.6	13.0

p<0.05

いつも気に掛けてくれていてと感じている者が多くなっている。

次に、スポーツクラブの活動以外のこと、たとえば学校や遊びのことなどについて、指導者と話をすることがあるか尋ねると表11のような結果となった。全体としては「ときどき話をする」という者が多く、4割程度を占めている。「よく話をする」という者はA群で23.8%、B群で15.2%、C群で9.7%となっており、試合への出場機会が多い者ほど指導者と様々な話をしていることがうかがえる結果となった。「話をすることはない」という者は試合への出場機会が少ない、いわゆるイレギュラー群に多くなっている。

以上のように、指導者と子どもの交流においては、いわゆるレギュラー群の方がイレギュラー群に比べて、指導者の配慮を感じたり、指導者と会話をするなど、交流の程度が深いことが明らかになった。

表11 クラブの活動以外の話

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
よく話をする	23.8	15.2	9.7	18.4
ときどき話をする	41.9	43.4	34.3	40.6
あまり話をすることはない	21.4	20.2	28.0	22.6
話をすることはない	12.9	21.2	28.0	18.4

p<0.01

さらに、クラブ内においてクラブのみんなとの交流がうまくいっているか尋ねると表12に示すような結果となった。

A群では交流が「うまくいっている」と回答した者が73.6%となっており、ほぼ四分の三を占めている。B群やC群ではA群に比較して「うまくいっている」と回答した者は少なくなっている。これに対して、クラブ員との交流が「あまりうまくいっていない」、あるいは、「うまくいっていない」という者は全体では6.1%であり、そ

表12 クラブ員との交流

(%)

項目	A群	B群	C群	全体
うまくいっている	73.6	54.9	50.5	63.7
どちらかといえばうまくいっている	22.6	38.2	38.7	30.2
あまりうまくいっていない・うまくいっていない	3.8	6.9	10.8	6.1

p<0.001

れほど多くないが、C群では10.8%となっており、A群やB群に比べて多くなっている。

指導者との交流においてみられたのと同様に、クラブ員との交流においてもレギュラー群がイレギュラー群に比べて、交流状況がよいという結果となった。

3. 活動意識

(1) スポーツ意識

スポーツをするうえで何が大切だと思うか、スポーツの価値をどのように捉えているか尋ねてみた。具体的には、「勝つこと」、「一生懸命やること」、「楽しくやること」のうち、どれを選択するかという方法をとった。結果は表13に示す通りである。全体としては、「一生懸命やればそれでいいと思う」と回答した者が最も多く、50.0%を占めている。次いで、「やるからには勝つことが大事だと思う」と回答した者が25.7%、「楽しくやれることが一番だと思う」と回答した者が19.1%と続いている。全体としては、スポーツを実施する際、一生懸命にベストを尽くして取り組むことが最も重要であると考えている子どもが多いことがうかがわれる。

各群を比較すると、A群、B群、C群の順に「勝つこと」に重きを置く者が多くなっており、レギュラー群では準レギュラー群、イレギュラー群に比較して勝利への志向が強い傾向がみられる。これに対して準レギュラー群やイレギュラー群では「一生懸命やること」に重きを置く者が多くなっている。

表13 大切だと思うこと (%)

項目	A群	B群	C群	全体
やるからには勝つことが大事だと思う	31.4	21.8	17.2	25.7
一生懸命やればそれでいいと思う	44.8	57.4	53.8	50.0
楽しくやれることが一番だと思う	21.9	15.8	16.1	19.1
あまり考えたことがない	1.9	5.0	12.9	5.2

p<0.001

(2) 活動の目標

次に、実際のスポーツクラブの活動において、どのような目標をもって活動に参加しているか具体的に尋ねると表14のようになった。全体としては、「大会・試合で

勝つ」ことを目標としている者が多くなっている。これに加えて、「いろいろな技術を身につける」ことや「将来プロの選手になる」ことを目標としている者が多くなっている。これらのことから考えて、スポーツクラブの活動を通していろいろな技術を身につけ、大会や試合で勝利を収め、できれば将来プロの選手になるという夢や希望をもって活動している子どもがいることがうかがわれる。

各群を比較すると、A群では「将来プロの選手になる」ことや「大会・試合で勝つ」ことを目標としている者がB群やC群に比べて多く、プロ志向や勝利志向の強さを示している。これに対してC群では、「いろいろな技術を身につける」ことや「健康や体力を身につける」ことを目標としている者が多く、「将来プロの選手になる」ことや「大会・試合で勝つ」ことを目標としている者は少ない。

表14 活動の目標 M.A. (%)

項目	A群	B群	C群	全体
大会・試合で勝つ	36.6	28.4	18.3	30.4
いろいろな技術を身につける	29.1	22.5	36.6	29.2
将来プロの選手になる	38.0	26.5	11.8	29.2
健康や体力を身につける	17.4	25.5	32.3	22.8
チームのみんなと仲良く活動する	17.4	17.6	20.4	18.1
スポーツを楽しむ	17.8	13.7	20.4	17.4
選手(レギュラー)になる	5.2	18.6	29.0	14.0
大きな大会に出場する	13.1	10.8	5.4	10.8
精神をきたえる	7.0	7.8	8.6	7.6
その他	1.4	2.9	0.0	1.5

(3) 活動実態に対する意識

子どもたちは、ふだんの活動(練習)について、どのような意識をもっているのだろうか。実際の活動実態について、子どもの意識という側面からアプローチすることにした。表15はスポーツクラブでの練習のレベルが自分にあっているか尋ねた結果を示している。全体としては「ちょうどよい」という者が最も多く、63.8%を占めている。次いで「むずかしすぎる」、あるいは「ややむずかしすぎる」という者が24.4%、「やややさしすぎる」、あるいは「やさしすぎる」という者は11.8%にとどまり、少なくなっている。

それぞれの群においても、「ちょうどよい」と回答し

た者が最も多くなっている。しかし、「むずかしすぎる」、あるいは「ややむずかしすぎる」と回答した者はA群で13.7%、B群で29.4%、C群で43.0%となっており、レギュラー群、準レギュラー群、イレギュラー群の間で大きな差異を示している。同様に、「やややさしすぎる」、あるいは「やさしすぎる」と回答した者はレギュラー群であるA群では16.6%を占めているのに対して、準レギュラー群、イレギュラー群となるに従い減少し、イレギュラー群においてはわずかに1.1%を占めるにとどまっている。このように、イレギュラー群の中にはふだんの練習のレベルが高すぎて自分にはむずかしすぎると思っている者が多くいることがわかる。

表15 練習のレベル (%)

項 目	A群	B群	C群	全体
むずかしすぎる・ ややむずかしすぎる	13.7	29.4	43.0	24.4
ちょうどよい	69.7	58.8	55.9	63.8
やややさしすぎる・やさしすぎる	16.6	11.8	1.1	11.8

p<0.001

次に、練習時間の長さについて示すと表16のようになる。全体では、「ちょうどよい」と回答した者が最も多く、57.8%を占めている。これに次いで「長すぎる」、あるいは「やや長すぎる」と回答した者が23.2%、「やや短すぎる」、あるいは「短すぎる」と回答した者が19.0%と続いている。「長すぎる」、あるいは「やや長すぎる」と回答した者と「やや短すぎる」、あるいは「短すぎる」と回答した者は、それぞれ2割程度を占めており、練習時間の長さについては長すぎるという指摘や短すぎるという指摘に著しい偏りはみられなかった。

各群を比較すると、C群ではA群やB群に比べて、「長すぎる」、あるいは「やや長すぎる」と回答した者が多く、A群ではB群やC群に比べて、「やや短すぎる」、あるいは「短すぎる」と回答した者が多くなっている。このように、イレギュラー群では練習時間が長すぎると思っている者が多く、レギュラー群では練習時間が短すぎると思っている者が多くなっている。このような違いは、イレギュラー群がレギュラー群に比べて体力的に劣っていて、長時間の練習に耐えられない状況にあるということを示しているように思われる反面、レギュラー群とイレギュラー群の活動への関与の程度や活動への意欲

の違いが関係しているようにも思われる。レギュラー群は練習において、関与の程度が高く、意欲をもって活動しているので、練習時間が長すぎると感じない。これに対して、イレギュラー群では、レギュラー群に比べて練習に積極的に関与できる場面が少なく、そのため、練習に対する意欲も高まることなく、ただ時間の経過を待つという状況があり、練習時間が長すぎると感じてしまう。そのような状況があることも予測される。

表16 練習時間の長さ (%)

項 目	A群	B群	C群	全体
長すぎる・やや長すぎる	20.3	21.8	31.2	23.2
ちょうどよい	54.7	61.4	61.3	57.8
やや短すぎる・短すぎる	25.0	16.8	7.5	19.0

p<0.01

さらに、練習日数について示すと表17のようになる。全体としては、「ちょうどよい」と回答した者が58.4%で最も多くなっているが、「多すぎる」、あるいは「やや多すぎる」と回答した者も26.2%おり、練習日数の多さを指摘する者が全体の四分の一を越えている。

各群をみると、「ちょうどよい」という現状を肯定する者はA群やB群に多く、「多すぎる」、あるいは「やや多すぎる」という者はC群に多いという傾向がみられるが、各群と練習日数に対する意識の間には関連は認められなかった。

表17 練習日数 (%)

項 目	A群	B群	C群	全体
多すぎる・やや多すぎる	22.1	24.5	37.6	26.2
ちょうどよい	61.5	57.9	51.6	58.4
やや少なすぎる・少なすぎる	16.4	17.6	10.8	15.4

n.s.

(4) 活動に対する満足度

これまでみてきたように、子どもたちはスポーツクラブの活動に様々な思いを抱きながら、日々の活動に取り組んでいる。子どもたちが将来、スポーツ活動を継続して実施していくうえで重要な要素の一つとなるのは、子どものとき、スポーツ活動にどのように取り組み、スポーツに対してどのような意識を形成したかということであろう。そして、このスポーツに対する意識の形成には、スポーツクラブの活動にどの程度満足することができた

かということが関係しているように思われる。

表18は、スポーツクラブでの様々なことから考え合わせたとえでの、スポーツクラブの活動に対する子どもたちの総合的な満足度を示している。全体では53.6%の者が「とても満足している」と回答している。これに「まあ満足している」という者を加えると、全体の94.5%の者が満足していることになり、スポーツクラブの活動に対する満足度は高いといえよう。

各群を比較すると「とても満足している」と回答した者は、A群では63.8%、B群では45.1%、C群では40.0%となっており、試合への出場機会が多いレギュラー群において満足度が高くなっていることがわかる。これまでの研究でも指摘されているように、大会や試合で勝つことを目標としているクラブが多く、そのために、活動自体も、いわゆるレギュラーを中心としたものとなっている可能性が高いことが推測される。このような活動状況の中で、レギュラー群の満足度が高くなっているものと思われる。

表18 活動の満足度 (%)

項 目	A群	B群	C群	全体
とても満足している	63.8	45.1	40.0	53.6
まあ満足している	30.4	52.0	52.2	40.9
あまり満足していない・満足していない	5.8	2.9	7.8	5.5

p<0.001

(5) 継続意志

今後のスポーツの実施について、現在、スポーツクラブで実施しているスポーツ種目を、これからも継続してやっていきたいと思うか尋ねた。結果は表19に示している。「継続してやっていきたいと思えますか」という質問に対して、全体では、「そう思う」と回答した者が65.3%、「どちらかといえばそう思う」と回答した者が22.6%いる。この両者を合わせた約9割の者が、スポーツクラブで実施しているスポーツ種目の継続実施の意志を示している。多くの子どもたちが継続実施の意志を示したことは好ましいことであるが、残りの1割程度の者は継続してやっていきたいと思わないと回答しており、こういった子どもたちを少しでも減少させるようなスポーツクラブのあり方を考えることが必要となろう。

各群の比較では、「そう思う」という、明確な継続意志を示した者は、A群では73.5%、B群では64.6%、C群では47.2%となっており、レギュラー群、準レギュラー群、イレギュラー群の順に多くなっている。スポーツクラブでの積極的な活動実施によって継続意志が高まっているものと思われる。他方、「どちらかといえばそう思わない」、あるいは「そうは思わない」という、継続の意志を示さない者はA群やB群に比べてC群で多くなっている。このイレギュラー群に対する適切な対応が今後求められることになる。

表19 継続意志 (%)

項 目	A群	B群	C群	全体
そう思う	73.5	64.6	47.2	65.3
どちらかといえばそう思う	17.8	27.5	28.0	22.6
どちらかといえばそう思わない	5.8	5.9	15.1	7.9
そうは思わない	2.9	2.0	9.7	4.2

p<0.001

IV. 結 語

本研究では、子どものスポーツクラブの活動を子どもの立場から捉え直すことを目指し、スポーツクラブの活動の実態やスポーツクラブの活動に対する子どもたちの意識について検討を加えてきた。その際、子どもたちを試合への出場状況により、レギュラー群、準レギュラー群、イレギュラー群に分類し、子どもたちの活動の実態や活動に対する意識がこの分類によって異なるのかということを中心に分析した。その結果の概要は以下のようになる。

いつも選手として試合に出場する、いわゆるレギュラー群は5年生より6年生が多くなっている。レギュラー群は準レギュラー群やイレギュラー群に比較して、クラブでの活動歴が長く、クラブの活動への参加にも積極的であり、クラブ内での技能レベルも高くなっている。このことが試合への出場に結びついているものと思われる。

クラブでの交流状況については、レギュラー群では、体調が悪いときやけがをしているときに指導者が心配してくれようという者が多く、クラブの活動以外のこと、た

例えば学校や遊びのことなどについても指導者とよく話をするとという者が多くなっている。これに対して準レギュラー群やイレギュラー群では指導者との関わりが少ない者が多い。大会や試合を目指す中で、ややもするとレギュラー中心の活動になりがちであるが、指導者は準レギュラーやイレギュラーに対しても十分な配慮を示すことが必要となろう。

また、クラブ員との交流については、レギュラー群において準レギュラー群やイレギュラー群に比べて、交流がうまくいっていると回答する者が多くなっている。準レギュラーやイレギュラーの中には、クラブの活動において中心となって活躍しているレギュラーたちの輪に入れないで、何となく疎外感を感じている者がいるのではないだろうか。このような子どもたちの人間関係を明らかにするには、さらに詳細な研究が必要となろう。いずれにしても、指導者には、すべてのクラブ員がよい人間関係をつくり活動できる場の設定を常に心がけることが求められることになろう。

次に、スポーツやスポーツクラブでの活動に対する意識については、スポーツをするうえで大切だと思うこととして、レギュラー群では「勝つこと」をあげる者が多く、勝利を志向する傾向が強いことを示していた。また、スポーツクラブ活動への参加目標においても、レギュラー群では、「大会・試合で勝つ」ことや「将来プロの選手になる」ことをあげる者が多く、競技力を高め、大会や試合でよい成績を取め、将来、プロの選手になるという希望をもっている者が多くなっている。このように、レギュラー群では、より高いレベルに到達することを望む傾向が強くみられる。

ふだんのスポーツクラブの活動については、準レギュラー群やイレギュラー群ではレギュラー群に比べて、練習のレベルが高く、むずかしすぎる、あるいは、ややむずかしすぎると回答する者が多くなっている。ふだんの練習がレギュラーのレベルに合わせたものとなっている傾向をうかがうことができる。

スポーツクラブでの活動を総合的に考えたときの満足度については、レギュラー群、準レギュラー群、イレギュラー群の順に高くなっており、レギュラー群だけでなく準レギュラー群、さらには、イレギュラー群の子どもたちも満足できるクラブのあり方が今後問われることになろう。

文 献

- 藤田紀昭(1992) 子どもの生活とスポーツ. 四国スポーツ研究会編 子どものスポーツ, その光と影—生涯スポーツに向けて—. 不味堂出版:東京, pp.17-37.
- 藤原誠(1997) 子どものスポーツに関する研究—スポーツクラブからの離脱を中心に—. 愛媛大学教育学部保健体育紀要1: 21-34.
- 藤原誠, 堺賢治(2003) 中学生のスポーツクラブへの加入に関する研究. 愛媛大学教育学部保健体育紀要4: 29-38.
- 池田勝他(2001) スポーツ白書2010. SSF笹川スポーツ財団:東京, pp.54-55.
- 水内宏(1991) 子どもたちのすこやかな発達と部活. 城丸章夫・水内宏編 スポーツ部活はいま. 青木書店:東京, pp.27-43.
- 文部省(2000) スポーツ振興基本計画.
- 武藤芳照(1988) 子どもの子どものよる子どものためのスポーツ. 武藤芳照編・著 小・中学生への気になるスポーツ指導. 草土文化:東京, pp.5-34.
- (財)日本体育協会(2001) 21世紀の国民スポーツ振興方策. (資料3) スポーツ少年団登録状況(推移).
- (財)日本体育協会日本スポーツ少年団(2003) スポーツジャスト. 403: 36-37